



- ① 7月に行われた「第6回鹿屋市高校生ビブリオバトル大会」表彰式
- ② 毎月第3土曜日に開催される図書館スタッフによる読み聞かせ
- ③ 大始良小学校図書館で本を読む生徒
- ④ 鹿屋中学校の朝読書の様子

私たちは「言葉」でできている 本は「言葉」を教えてくれる

読書の本当の価値とは何でしょうか。インタビューをしていく中で見えてきた、読書の様々なメリット。しかしそれ以上に、読書を通じて自分の考えを見つめ直したり、親と子を結び付けてくれたり…「メリット」という言葉では計ることできない、多くの側面が読書にはありました。

私たちの人生は言葉でいっぱいです。読書をするということは誰かの言葉、すなわち誰かの人生に寄り添うということなのかもしれません。

まずは大人から、読書を通じて豊かな言葉を身に付けていくことが、子どもたちの豊かな人生を後押ししていくのではないのでしょうか。

Interview 親子の絆を読書へつなげる

大始良小学校 なかむら なるみ 校長

— Profile —

東串良町出身。平成28～30年度の3年間、県立奄美図書館に勤務。図書館での事業のほか生涯学習担当の指導主事として作家、島尾敏雄の生誕100年事業や市民講座「あまみならでは学舎」の事業などを担当。令和4年度から大始良小学校の校長を務める。



学校と家庭から 本に触れる環境を

読書が子どもにも与える影響は

- ① 新しい知識や情報を得る
- ② 作者の思いを知ることができる
- ③ 文章を読んで世界観を想像する
- ④ 言葉を多く知り、語彙が増える
- ⑤ 子ども自身が内面を見つめる時間を作ることができる

など、知識や感情を育てるための良い影響がたくさん含まれていますが、読み聞かせを多くしてもらった子どもは、その後の読書量が増えるといった調査結果もあり、幼い頃から読み聞かせで本に触れた積み重ねが、現在の読書量につながっていると思います。

学校としては、「親と子の20分間読書」を推進しています。これは子どもの読書を推進することも目的の一つですが、重要なのは「親と子の信頼関係を構築すること」です。今の子どもたちは核家族化や習い事、部活やお稽古で忙しく、親子で触れ合う時間が取りにくくなっています。親の皆さんも忙しく余裕がないかと思いますが、家庭では5分でも10分でもいいので、読書を通じて子どもとじっくり向き合う時間を作ることが重要です。



地元の企業である(株)南九の山下幸一会長が「子どもに多くの本を読んで欲しい」と同校へ寄附。学校で本を購入し「山下文庫」として学校図書館に設置している。

学校では、PTA等と連携しながら、少しでも本に親しむことができるような読書推進を行っています。読み聞かせで本に触れるきっかけを作るのはもちろん、赤組と白組に分かれて読書量を競う「読書運動会」や学校図書館で200冊以上借りた子どもを表彰するなど、多くの本に親しみ、継続して借りたくなるよう取り組んでいます。

子どもは本が大好きで、たくさん読んだ子どもは集中力が育ったり、本を通じて友達と交流したりするなど豊かな学校生活につながっていると思います。今はアニメやドラマ、映画でも小説が原作のものが多く、子どもが興味を向けた分野から読書につながっていくと、本を普段あまり読まない子が本に触れるきっかけになると思います。

郷土作家「むくはとじゅう椋鳩十」が広めた「母と子の20分間読書」

「母と子の20分間読書」運動は、当時鹿児島県立図書館長を務めていた作家、椋鳩十が親子のふれあいを大切にする目的で提唱。本市では「親と子の20分間読書」を推進しています。

内容は子どもが声に出して本を読み、そのとなりで、家族がじっと耳を傾けるというもの。また、椋鳩十は子どもへの読み聞

かせについて「心を込めて読んでやれば、優しい母の声が子どもの中に入り込んでゆくのである。この懐かしい母の声は、金の鈴の音をたてて、子どもの心の中で鳴り続けるのである。」（『お母さんの声は金の鈴』）と述べています。

